

学が発掘調査した古墳です。私は、姫塚・姫塚古墳の調査成果とはにわ祭を題材にした企画展の図録作成や展示に関わりました。その中で、考古学の成果を一般の方にわかりやすく伝えることの重要性や難しさを学びました。

最後に現在の私の研究を紹介します。私は古墳時代後期から終末期の香取海周辺地域を対象として、前方後円墳の設計原理について研究しています。前方後円墳には様々な型があり、背景には権力の結びつきや階層構造があると考えられています。そして、古墳を築造する際の「物差し」についても様々な議論があります。私は測量やレーダー探査などの野外調査と前方後円墳の三次元化を通して、前方後円墳の設計原理や香取海周辺の社会構造を明らかにしていこうと考えています。また、考古学の成果を社会に還元するという点に関しては、埴輪の三次元スキャンや写真撮影を行い、報告書や博物館の展示に役立てるための資料を作成しています。

考古学について一部しか紹介できませんでしたが、少しでも考古学に興味を持ってくれた方がいらつしゃれば嬉しく思います。

## 〈第二回〉

### 私と歴史学

― 出会いとその面白さ ―

高橋 央

今日は皆様のコース選択の御参考として私が何故歴史学という学問分野を選択したかについてまず御説明いたします。私が歴史に興味を持った初発の動機はメディアからでした。大河ドラマや年末時代劇、歴史漫画を大学入学前に視聴し愛読しました。史実を背景としたドラマの人物描写の面白さにひかれ歴史とそこに生きる人間への強い関心が芽生え、大学で歴史学を専攻したいと考え日本史学専攻に所属いたしました。二年次に進級の際専門とする時代の選

択を求められ、近現代史を主専攻とすることにしました。理由は現代に直結する時代として、近現代という時代の理解と研究が必要と考えたためです。その際は「歴史とは現在と過去との対話」だとするカーの『歴史とは何か』（岩波新書、一九六二年）が参考になりました。卒論のテーマには吉野作造の民本主義を選択しました。

早稲田大学大学院文学研究科に進学し、当然のことながら、論文における独自性の重要性を改めて学びました。またダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店、上下巻、二〇〇一年）のような優れた研究と出会いました。論旨の一つとして日本が戦後改革をなしたとげたのは、単にアメリカの改革を受け入れただけではなく、日本人自身に改革をする素地があった、というものがあります。私はダワーの主張を読み、日本の民主主義思想に関してもそうなのでは、日本近現代史のダイナミズムの中で民主主義の歴史を考えたという問題意識を改めて持ち、修士論文でも民本主義を主題とし現在

に至っております。また早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』（みすず書房、全十一巻、刊行中）の編集委員として、大隈重信宛書翰の解読と年代推定の作業を担当しています。書翰の解読と年代推定というものは決して簡単ではないのですが、大隈にあてた政治、教育等に関する意見、個人的な相談等多岐にわたる内容があり、史料を読む面白さも感じつつ作業をしております。

次に史料の面白さについてお話ししたいと思います。最初に次の吉野作造の書翰を御覧ください。

「之は写真の上に独乙語の先生が油絵の絵具で色をつけて下したのです（中略）金の時計の御土産を欲しい人はお大人しくしなければ駄目」（抜粋。吉野作造書翰 吉野信子・明子・光子・秀子・敬子宛、一九一〇年八月二十九日、『吉野作造選集』別巻一三頁、岩波書店、一九九七年）

これはハイデルベルクに留学中の吉野が

日本で待つ家族（娘達）に送った本人の写真付絵葉書の文面です。吉野の三年間の欧米留学は、世界的なデモクラシー運動の高揚を確信させる機会であり、後の民本主義の提唱につながる貴重な経験でした。その一方留学は相当な経済的負担であり、家族と別れるさみしい時期でもありました。この短文の書翰の中に、新進の政治学者である吉野の優しい父親としての顔が見えます。即ち明治末期の留学の大変さと、家族を思う吉野の人間性を書翰（史料）から確認できるのです。

次に大隈重信の演説史料を御覧下さい。

「諸君は必らず失敗をする、随分失敗をする、又成功があるかも知れませぬけれども成功より失敗が多い、失敗に落胆しなざるな、失敗に打勝たなければならぬ、度々失敗するとそれで此大切な経験を得る、其経験に依つて以て成功を期さなければならぬのである、所で此複雑なる社会の大洋に於て航海の羅針盤は何であるか、学問だ」（『早稲田学報』第五

号二頁、一八九七年七月）

これは東京専門学校（現早稲田大学）第十四回得業証書授与式での大隈の演説です。大隈重信は二度内閣総理大臣に就任し早稲田大学を創設しました。しかしその人生には少なからぬ挫折や失敗がありました。明治政府の参議であつた大隈は立憲政治体制構想の相違と対立から、辞職に追い込まれます（明治十四年の政変）。政府下野後政党政治の発展と人材の育成を期し、立憲改進黨と東京専門学校を一八八二年に創設しました。しかし創立当初の東京専門学校は当時の政府から疑念の目で見られたため、大隈は創立者でありながら、この創立十五年の時まで、学校の公式行事に参加しなかったのです。先程の演説は大隈が自己の経験を踏まえ学生を激励し、また人生の指針としての学問の重要性を主張したものののです。この演説史料から我々は挫折や失敗にくじけない、強靱な大隈の人物を学ぶことができます。

話をまとめますと、歴史学とは何か、と

問われれば私は史料から過去を生きた人々の個性・人格・生涯を学ぶことと答えます。そこには今日を生きる我々と異なりまた重なる人々の人生を見ることができません。現在そして未来を生きる我々が如何に生き、如何なる社会を構築すべきかという問題を考える時、歴史学は大変参考になるのです。そこに面白さと意義があると私は考えます。御清聴有難うございました。

## 朝鮮古代史から見えること

—七世紀後半の新羅・  
唐関係の研究を通じて—

植田 喜兵成智

本稿は、筆者が専門とする朝鮮古代史の研究を通じて、いかなることを学んできたのかについて講演した内容を要約したものである。

第一に、筆者が研究対象とする古代朝鮮

と呼ばれる時代と七世紀後半の新羅と唐関係を紹介した。朝鮮の古代とは、大まかに三国時代と統一新羅時代を指す。三国時代は、新羅、高句麗、百済の三つの国が朝鮮半島で覇権を争っていた時代であり、統一新羅時代は、唐と協力して百済と高句麗を滅ぼした新羅が対唐戦争にも勝利して以降、すなわち朝鮮半島における覇権を確立した時代のことである。

そのような朝鮮古代史のなかでも七世紀後半の新羅と唐の關係に注目している。七世紀後半の両国の關係は、友好↓敵対↓友好というように、めまぐるしく変化しており、新羅が朝鮮半島を統一していく過渡期であると同時に、百済と高句麗が滅亡したことによって、大きく国際情勢が変化した時期である。したがって、当時の国際情勢や朝鮮の歴史展開を理解するうえでも重要な時期といえる。

第二に、現在の専攻を選択したきっかけを説明し、朝鮮史（外国史）のどこに魅力を感じたのかについて述べた。筆者は、学

部入学時から国際関係やアジア情勢に興味を持っており、日本、朝鮮、中国の全地域が関連する白村江の戦い（六六三年）という古代の歴史的事件に興味を引かれることになった。

白村江の戦いは、倭（日本）、唐（中国）、新羅（朝鮮）のそれぞれの国において史料が残されており、なかでも『日本書紀』は戦闘の経過に関する詳しい記録が残っている。しかし、筆者の関心は、日本以外の中国と朝鮮はどのような記録を残しているのかというところにあった。調査してみると、白村江の戦いは、中国側史料（『旧唐書』など正史類）では辺境の一戦闘に過ぎず、朝鮮側史料（『三国史記』）でも記事の比重があまり大きくないことに気付いた。つまり、日本にとっては重要な事件であったとしても、中国や朝鮮では重要度が異なっているのである。

このように同じ事件であっても、視点を変えると、別の見方が生じてくるところに外国史をやる魅力があるのではなからう